

VII. 保育実習指導における連携・協働の方法

- ① 実習生が自身の保育について省察することを促す。
- ② 実習指導の評価を踏まえて、実習指導方法を改善する。
- ③ 実習後にも継続して保育者として成長したいと思う職業能力育成を行う。

1. 保育実習指導における連携・協働の方法（養成校）

学生は授業を中心に、実習前や実習後に実習での取り組みを学び実践の場に臨むこととなる。養成校教員は実習中の実習施設での取り組みへの理解も含めた実習全体を把握することにより、養成校教員の役割を明確にできる。これは学生個人に応じた実習指導の充実に寄与する。詳しくは、「VII.2.保育実習指導における連携・協働の方法（実習施設）」を参照されたい。

【養成校内における連携と協働】

養成校教員には、実習の事前指導が始まる前に、養成校全体の実習指導體制を整えることが求められる。主には実習施設との調整と、実習全体のスケジュール、実習訪問などを分担する協働がある。特に実習中に実施される実習訪問の訪問先の配当と養成校で学生と実習施設に訪問する訪問教員との顔合わせの場を設定しておきたい。そのために、実習指導者は、日頃から訪問教員や事務職員とフラットで良好な関係づくりを心掛けながら、実習指導を行う必要がある。また、訪問教員向けの実習訪問マニュアルを作成し、養成校教員全員で確認し合う共通理解により、指導担当職員だけでなく、養成校全体で実習生を養成する意識の共有と連携を図ることができる。学生は、実習指導者だけでなく、他の訪問指導者から声をかけてもらうことで緊張がほぐれやすい。率直な実習への思いなどを伝える安心できる関係性の中で、実習を客観視する時間を持つことができる。また実習の向き合い方を切り替える貴重な場となりうる。前向きに実習に向き合うための心のサポート、学生に有益な事後指導、実習施設情報の共有など、実習担当教員、訪問指導者、事務職員の協働による養成校内の連携は欠かせない。

【保育実習指導のPDCA サイクル】

詳しくは、II.2. 保育実習 I（保育所）と他教科目との関連（4）保育のPDCA サイクル、VI保育実習指導の計画の策定（1）④、（2）2）④指導計画の作成・実践・観察・記録・評価を参照されたい。

効果的な実習指導を行うためには、実習指導者と指導担当職員の協働性と同僚性が必要である。実習生を中心に、養成校の実習指導者と指導担当職員の3者がそれぞれの役割を担いながら実習に関わる意識を常に大切にしたい。一連のPDCA サイクルはひとつの実習で完結するのではなく、さらに次の実習のPDCA サイクルへ繋ぎながら保育の評価を

らせん状に繰り返し続ける手法である。保育士等の職務の実現、保育士等の専門性の質向上の観点からも重要となる。

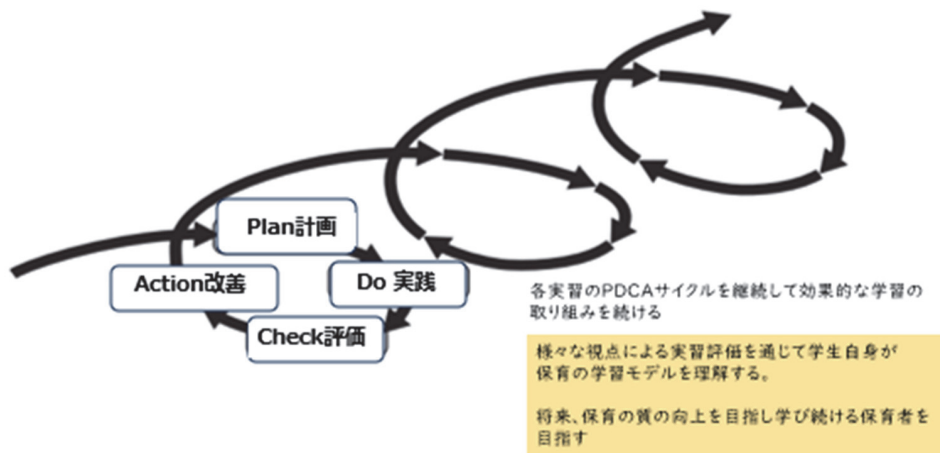
【養成校教員】シラバスに基づいた授業の展開に関する PDCA サイクルの実施により、授業改善が促進され、学生の実態に寄り添った授業が展開される。

P (Plan プラン) 担当教員が実習事前・事後指導の計画を立案、同僚間で共有

D (Do 実践) 担当教員が立案した実習指導の計画を実践・展開

C (Check 評価) 授業評価や学生のコメント、保育実習施設による評価や実習記録の成果から学生の習熟度を評価、実習指導への自己評価

A (Action 改善) 実習指導の計画内容を次回に向けたより良い方法へ改善



図表 7-1-1 らせんモデル

(1) 保育の省察

①事前指導・オリエンテーション

【学生】実習全体の見通しを持ちながら具体的で明確な実習の目標を設定することにつなげる。

【養成校教員】養成校は学生への事前指導を実施すると同時に、実習施設へ実習依頼等の手続きを進めていく。実習評価票の項目は学生の実習の目的に沿った取り組みの指標となるため、実習評価票を開示することについて実習施設と共通理解を図っておくことが大切である。

実習評価は学生が自己課題を明確にし、次の実習に取り組む重要な情報源である。

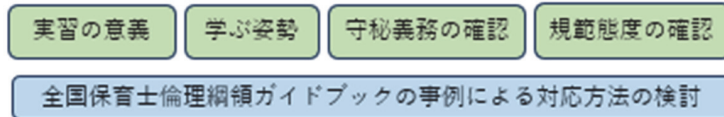
実習評価票を学生に開示することは必要な取り組みとなる。

開示する旨を事前に実習施設に文書等で連絡しておく。

実習施設と養成校で共通理解をもっておく。

図表 7-1-2 実習評価票の取り扱い

また、事前指導について学生自身が実習全体の見通しを持てるように、ポイントを絞り伝える。学生の理解度を確認して着実に準備を整えられるような授業計画が必要となる。



図表 7-1-3 養成校の授業で実習前に行う学習内容

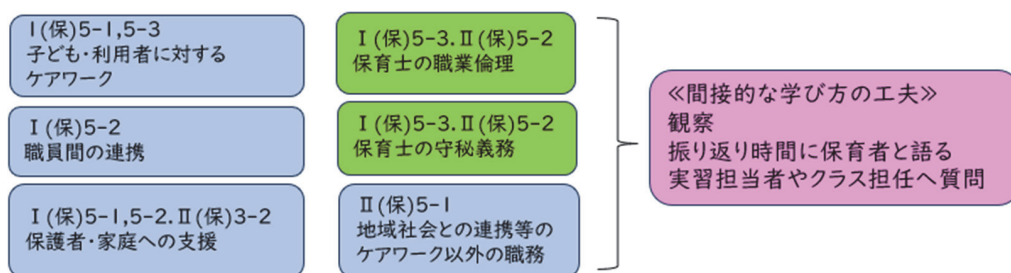
さらに学内オリエンテーションや、実習施設でのオリエンテーションをふまえ、学生の緊張が次第に高まる時期である。そのため、実習に意欲と楽しみを持てるような声掛けや励ます雰囲気づくりを大切にすることで、学生が保育実習前と保育実習後に省察しながら、保育への向き合い方への変化や成長を感じられるように関わりたい。

②訪問指導

【学生】養成校の訪問指導者が自分の実習のために実習施設へ訪問することは、普段の授業にはない特別な経験である。日頃の実習で戸惑っていることや体調面、気持ちの面について率直に報告をすることが必要となる。

【養成校教員】訪問指導者は学生が率直に話しやすい雰囲気づくりに努める。学生が実習中に直接アドバイスをうける貴重な学習の場であること、学生と実習施設を結びながら実習を円滑にすすめる役割を担っていることを事前に理解しておく。

実習訪問指導報告書も実習態度など関連する評価に反映されうるため、訪問中の学生の実習施設での様子、実習時間以外の生活面などを可能な範囲で情報収集するとよい。訪問する時期で学生へのサポートの内容が異なることにも留意したい。



図表 7-1-4 実習期間に直接関わるのが難しい職務内容の実習評価項目

図表 7-1-4 が示すように、実習中に学生が直接関わるのが難しい職務内容も実習評価項目には含まれる。実習施設から訪問教員に直接質問されることもあるため、観察や保育者と振り返りの時間などにテーマとして取り上げて話し合うことも学生の学びになることを伝え理解を求めることも必要である。

③実習中の指導

【学生】疑問点を直接質問したり実習記録に記載したりする積極的な働きかけを通じて実習施設の実習指導者への指導を受ける場面が増える。

【養成校教員】実習施設での休憩時間の電話、帰宅後の電話やリモート、メールで実習状況や学生の実習への向き合い方に変化がないかを把握することができる

④事後指導

<p>《共有する事項》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 実習評価を開示する意義 ・ 実習評価項目 ・ 実習評価基準 ・ 開示：学生が結果から学ぶ機会 事後指導等による学生のふり返り 今後の課題につなげる機会 <p>※学生に開示できない部分は別紙に記入し、開示しない手立ても可能</p>

図表 7-1-5 養成校と実習施設における実習評価票の共有事項

【学生】実習の実際を振り返り、出来た点、努力した点、改善の余地があった点など振り返る観点を決めてまとめてみる。話し合いにより様々な実習施設の保育方針や自分の取り組みの特徴に気付くことができる。記録にまとめることで、客観的に実習を省察できる。次の実習までに取り組むとよい知識や技能などが具体的に挙げられることが望ましい。

実習開示で実習施設の評価を知り、思いもよらない視点の評価を、感情的にならず、新たな個性や知識・技術の発見と受け止めたい。養成校の実習指導者の助言を参考にしたり、友人と普段からコミュニケーションを取ったりしながら、生活場面の中でも疑問をもち考え行動し、省察する習慣を身に付けるとよい。評価の結果を次の実習でどのように取り組むと良いかを検討する時間を設けることが大切である。うまくいかない経験こそ価値のある成長につながることを経験したいものである。

【養成校教員】学生自身が評価をもとに、次の実習でどのように取り組むとよいかを具体的に検討できる時間設定の確保を大切にしたい。また、マイナスな評価こそ学生自身の向き合い方で、成長の糧になるという励ましや、教員自身や他学生が失敗経験をどのように昇華したか経験談を語りながら、他者の経験から学ぶ大切さも組み入れたい内容である。

異なる実習体験を学生同士が共有し合い、保育の世界の素晴らしさ、子どもとの出逢いの喜びを味わえる区切りを持ちたい。感情的になっている経験を話し合いや記録、個別指導を通じてアウトプットし、学生自身が実習を総括できる取り組みを授業で取り入れたい。

⑤実習後の振り返り

【学生】省察は PDCA サイクルで重視される取組みの一つである。客観的に保育をふり返

る力を向上するためには、実習評価票の評価項目で、自分の実習に評価点をつけ、実習施設の評価と比較する取り組みは大変有効である。

【養成校教員】実習に対する自己評価は各自が自分自身と向きあつて点数化したものである。学生自身の評価を否定せず尊重する姿勢が何よりも大切となる。自己評価が高い学生には、課題を具体的な場面から見出す選択を評価項目から行う。自己評価が低い学生には何が評価結果の要因に当たるかを、一緒に探しながら肯定的に表現する受け止め方の実践に活かすことができる。この時点での学生へのフォローは重要である。進路選択に影響することを心にとめ、前向きに評価を受けとめられるように関わりたい。

1. 実習記録による自己評価

①時系列に沿った1日の保育の流れによる記録や、②エピソードの記録による記録など、記録の特徴によって自己評価に役立つポイントが異なる。それぞれの特徴を活用して、多様な視点から学生自身が自分の実習を分析する力の育成が可能となる。

2. 評価票による自己評価

実習終了後に、実習園に提出した評価票と同様の形式で自己評価を行い、実習の振り返りを行う。

さらにその自己評価を実習園の評価票と比較して、自己と他者の評価のずれから客観的に自分の取り組みを俯瞰する力を養うことが可能である。

その際には、養成校の実習指導者の助言や補足説明をふまえることで、新たな視点に気付くことができるよう、励ましも必要である。

図表 7-1-6 学生の自己評価

(2) 評価を踏まえた計画の改善

【学生】評価の内容は一喜一憂するものではないと理解するために、事前の実習計画で不十分な点を見つけ、次の実習計画へ活かす具体的な実践を行うことが求められる。

【養成校教員】学生の評価を個別、総合的にデータ化して実習指導内容を省察する。課題を見つけ、今後の実習指導へ活かす計画の改善を図る取り組みは大切である。実習指導者の実習指導にも PDCA サイクルが存在することを理解して、学生とともに学び続ける実習指導者を目指したいものである。

【実習を通した職業能力育成】

【学生】実習を通して保育者としてのやりがいを感じ、実習後も継続して保育者として成長を願い成長していくプロセスを歩むことを目指してほしい。また実習担当職員が実習後に「実習指導のための自己評価（保育所）」を実施し、よりよい実習を目指し努力していることにも気づきをもってほしいと願う。

【養成校教員】

学生の職業能力を育成するために養成校教員の関わり方は重要である。学生の実習経験が異なるため、学生同士が共有し合う中で、保育者の一員として活躍できるよう実習で修得

VII. 保育実習指導における連携・協働の方法

した技術や能力や未熟な点を学生ひとりずつが今後の課題として見出せるような授業方法の工夫が必要となる。

同時に継続して学び続けることの意義を実感して、実践できるような個別の継続的なサポート体制も求められる。特に実習種別で実習指導担当者が異なる場合には、学生の実習状況などの情報共有による引継ぎを行い、学生の職業能力の育成が継続するように努めたい。

【実習指導方法の改善につなげる取り組み例】

【養成校教員】実習評価票の活用した実習体験の場や学び方は様々な方法で実施が可能である。実習施設の状況に応じて、工夫をしながら実習体験の場をできるだけ提供してもらい、保育への学びを深められるように実習施設に協力を求めたい。

①守秘義務や個人情報の漏えい防止に努める等承諾を得て可能な範囲で開示された実習施設の資料から評価内容項目について学ぶ。

指導計画(全体的な計画・月案・週案など)
デイリープログラム
個人記録
連絡帳
園だより・クラスだより
指導の記録
環境づくりの記録
保健計画・避難訓練計画等
パンフレット

図表 7-1-7 実習施設の資料による知識・技術の習得（例）

②実習評価票の評価項目内容を学ぶための実習施設での取り組む行動を示す。時と場に応じて活用して学ぶ機会をつくっていききたい。

観察
参加
保育者への確認
話し合い
質問する機会
保育カンファレンス

図表 7-1-8 実習評価票の評価項目への取り組み方法（例）

③観察対象の年齢と場面の組み合わせによって実習評価票の評価項目内容や学生の実習課題を見つけることが可能になる。
ア. 年齢対象を選択し、その年齢で学べる保育場面と組み合わせてみる。
イ. ひとつの保育場面を選択し、同じ保育場面での発達過程を比較しながら子どもの成長を理解する。

生活の流れ		乳児 1歳児 2歳児 3歳児 4歳児 5歳児
生活場面	登所	
	降所	
	午前の活動	
	午後の活動	
	食事	
	間食	
	排せつ	
	午睡	
	遊び	

図表 7-1-9 観察対象と場面の組み合わせ（例）

Ⅶ. 保育実習指導における連携・協働の方法

④保育中に保育士等へ確認や質問をしてみる、保育記録へ質問を記載するなどの場を通じて学生が自ら学ぶ場をえることのできるテーマ例を以下に示す。養成校での事前指導の中で、どのようなテーマを保育士等に投げかけると自分の学びが深まるかを検討する時間を設け、実習課題にすることも考えられる。実習前に学生が、様々な学び方や場があることを理解して準備しておく機会の確保は大切である。

- ・保護者支援の場に立ち会う
- ・園庭開放を観察する機会

保育実習Ⅰ(保育所)		保育実習Ⅱ	
長時間保育	保育士の1日の職務内容	子どもの最善の利益	環境構成を変えた後の遊びや生活の変化
保育士としての心構え	家庭との連携に関わる職務	子どもの人権の尊重	現代社会の様々な保育ニーズ
子どもの発達過程	連絡帳や園クラスだより(家庭との連携)	説明責任	保育士のこれまでのキャリア
環境を通して行う保育	様々な働き方:正規職員 パートタイマー	個人情報の保護	地域の関係機関との連携方法 ・要保護児童対策地域協議会 ・児童相談所・児童家庭支援センター
家庭との連携	他職種の職員:保育士 看護師 栄養士	子どもへの対応	連携方法
発達過程に応じた援助の工夫点	登所・降所までの子どもや保護者に関する情報共有の仕方	・体調不良・アレルギー ・特別な配慮を要する子ども	小学校との連携方法
清潔保持のための取り組み			主体的に活動する姿を引き出す環境構成
健康で安全に過ごせる環境づくりのポイント	自己研鑽に繋ぐ研修方法や内容	行事等特別な活動における保育士等の具体的な動き	主体的に活動する姿を引き出す関わり
危機管理対策の取り組み	自己管理の工夫	環境を通して行う保育	PDCAサイクルに沿った取り組み
避難訓練の取り組み	登所・降所時の保護者とのコミュニケーション	生活や遊びを通して総合的に行う保育	子育て支援・育児支援

図表 7-1-10 保育者への確認、質問する機会、話合いのテーマ(例)

2. 保育実習指導における連携・協働の方法(実習施設)

養成校や学生の実習前や実習後の取り組み、実習全体の流れを把握することにより実習における保育士等の役割が明確にできる。これは学生に応じた実習指導の充実につながる。詳しくは、「Ⅶ 1. 保育実習指導における連携・協働の方法(養成校)」を参照されたい。

【実習施設内における連携と協働】

実習生を受け入れるために、自身の保育を提供しながら、同時に直接指導を行う実習期間は、実習施設や実習指導者、特に指導担当職員に大きく負担がかかることは否めない。実習指導者は、実習生を受け入れる際に、実習施設全体で受け入れるための実習指導体制を整えることが求められる。そのために、実習指導者は、日頃から職員とのフラットな関係を作りながら、職員との良好な関係の中で協働的な実習指導を行うことができるように心がけることが必要である。また、実習生受け入れマニュアルを作成し、職員全員で確認し共通理解することで、指導担当職員だけでなく、実習施設全体で実習生を受け入れる意識が持てるように実習受け入れマニュアル等を活用して施設内での受け入れ体制を作るようにする。実習生は、指導担当職員だけでなく、他の職員から声をかけてもらうことで緊張がほぐれ、

様々な保育士等と関わる中で、理想の保育士等に出会うことも可能性も広がるだろう。

【保育実習指導のPDCA サイクル】

効果的な実習指導を行うためには、実習指導者と指導担当職員の協働性と同僚性が必要である。実習生を中心にして、指導担当職員と養成校の実習指導者との3者がそれぞれの役割を担いながら実習に関わる意識を常に大切にしたい。

【保育士等】 日常保育と同様、保育実習中にPDCAサイクルを実施することにより保育者の協働的指導意欲の向上や保育職へのやりがいにつながる事が期待される。

P (Plan プラン) 担当保育士等を中心に実習生への実習指導の計画を立案、職員間で共有

D (Do 実践) 担当保育士等が立案した実習指導の計画を実習生へ実践・展開

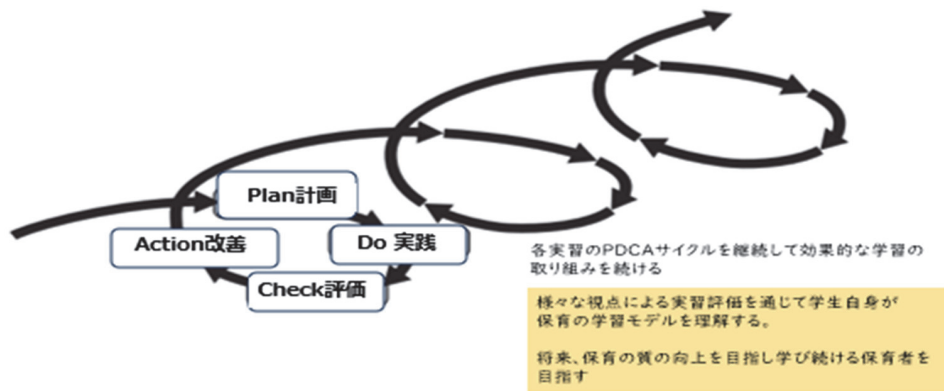
C (Check 評価) 振り返りの会や実習記録での実習生への評価、実習指導への自己評価

A (Action 改善) 実習指導の計画内容を次回に向けたより良い方法へ改善

実習生への健康状態の把握や実習態度の変化などを観察し、気になる点などが生じた場合にはすみやかに養成校へ連絡をする連携や情報共有が大切である。

保育現場におけるPDCAサイクルによる保育の質保障の実際を様々な書類の閲覧を通じて伝えることができる。

【保育士等】 らせんモデル(図表7-2-1)とは、ひとつの実習で取り組む保育運営の流れをひとつの実習で完結するのではなく、さらに次の実習のPDCAサイクルへ繋ぎながら保育の評価を繰り返し続ける手法のことである。



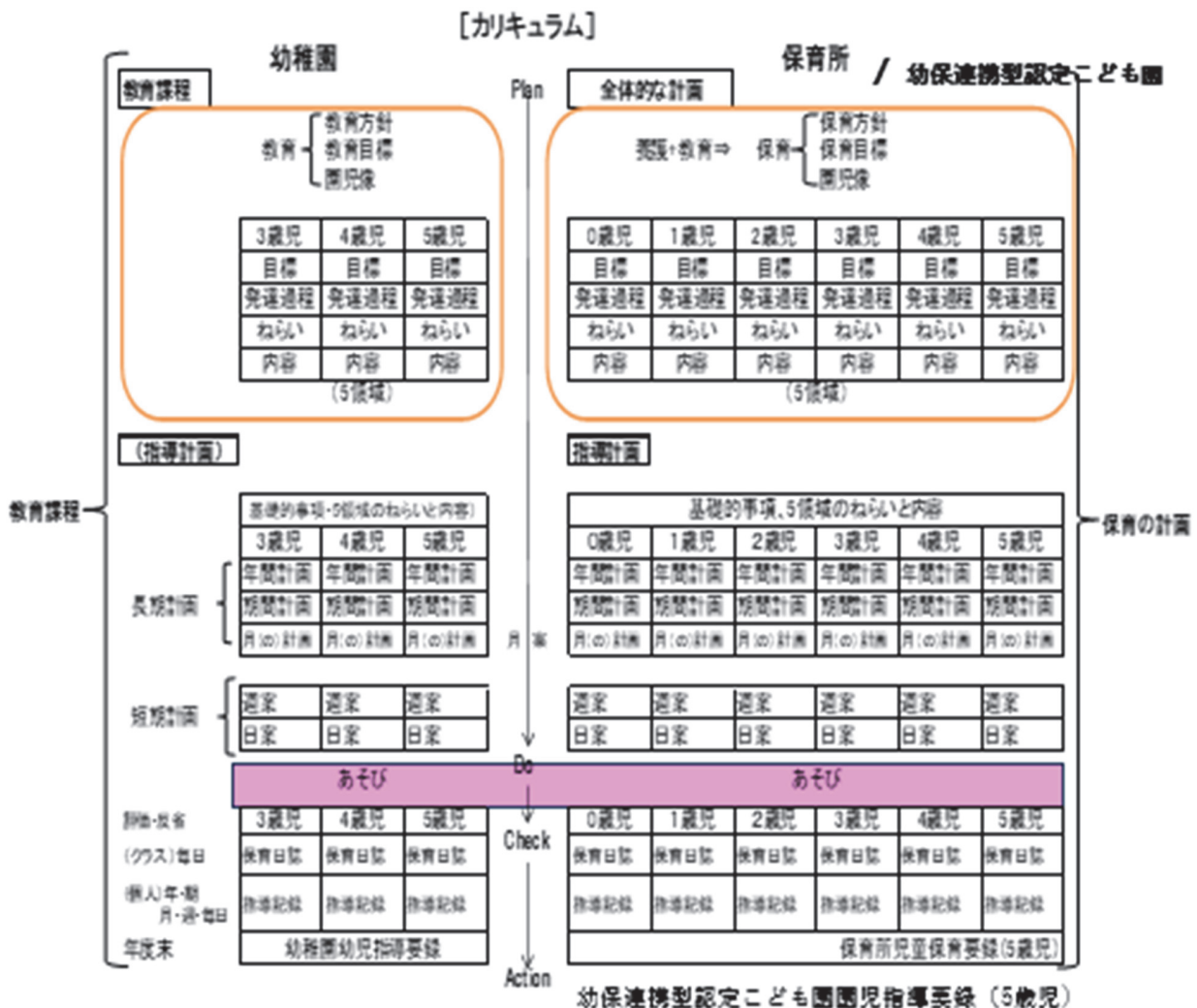
図表 7-2-1 らせんモデル

保育には入れ子構造のように(図表7-2-1)様々なカリキュラム(図表7-2-3)が関連して存在する。保育の指導計画を作成することは、日々子どもとの関わりに反映される重要な取り組みである。年間計画を基に月や期の計画、週の計画が日々の保育実践の実施に繋がっていることを保育士等は常に意識して子どもに関わることが求められ、日々実践を重ねている。さらに日々の保育実践後の振り返りとなる省察が週ごと、月や期ごと、年間の振り返りに繋がる大事にしたい取り組みである。



図表 7-2-2 入れ子構造モデル

保育実習においても保育における入れ子構造モデルと同様の仕組みが存在する。実習の流れと位置づけを意識しながら、実習受入れの体制や指導方法を具体的に組み立てた計画が必要となる。これは将来の保育の同僚となる保育者の育成という点において、保育現場は深く関わっているといえる。保育は実習から始まっているのである。

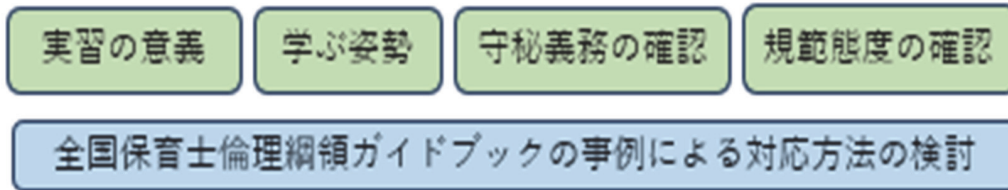


図表 7-2-3 保育におけるカリキュラムの構造

(1) 保育の省察

①事前指導・オリエンテーション

【保育士等】学生は、養成校で主に、図表 7-2-4 のような内容を事前に学習して実習に臨む。



図表 7-2-4 養成校の授業で実習前に行う学習内容

養成校は学生への事前指導を実施すると同時に、実習施設へ実習依頼等の手続きを進めていく。特に、実習評価票の項目は学生の実習の目的に沿った取組みの指標となるため、実習施設での実習評価票が養成校で開示されることについて共通理解を図っておくことが大切である。

実習事前オリエンテーションの場合は、情報共有と実習施設が事前に検討した実習計画をもとに内容を調整し、学生にとってよりよい実習となるよう実習計画を策定する貴重な機会である。様々な個性のある学生の状況に応じて、一般的な実習計画を柔軟に変更することが必要となる。学生自身の興味や関心に沿った実習課題を元に実習の配属クラスや実習方法を再検討した実習計画は、学生自身の考えが尊重された実習計画である。学生にとって実習課題が明確で具体的に振り返りやすく、実習後の学びの深まりをもたらす。

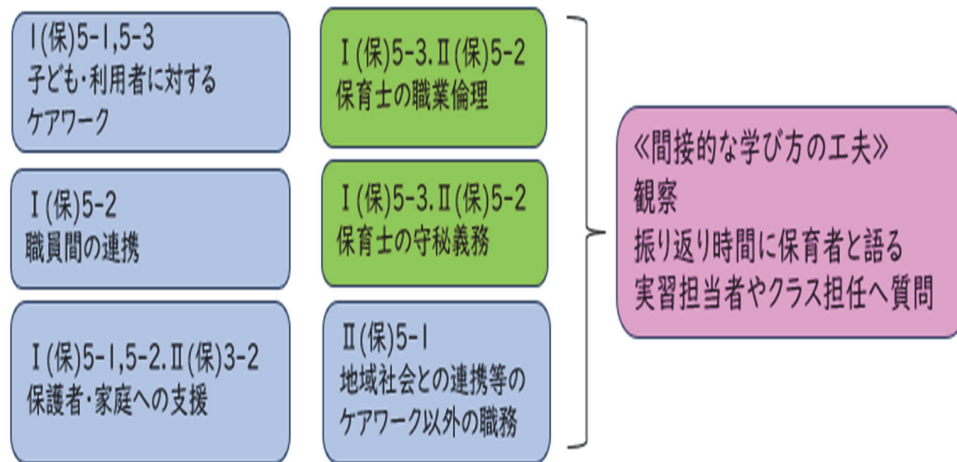
将来の保育の仲間として大切に見守られている実感は、学生の実習へのモチベーションになりうる。同時に、学生の緊張が高まる時期であるため、実習に意欲と楽しみを持てるような声かけや励まし、雰囲気づくりも大切にしたい。

実習評価は学生が自己課題を明確にし、次の実習に取り組む重要な情報源である。
 実習評価票を学生に開示することは必要な取組みとなる。
 開示する旨を事前に実習施設に文書等で連絡しておく。
 実習施設と養成校で共通理解をもっておく。

図表 7-2-5 実習評価票の取り扱い

また、実習評価票の評価項目には保育現場で実習中に取組みにくいとされる内容も存在する。しかしながら、保育士等になるために大切な学びの観点であることには変わらない。そこで学生が理解を深める場の設定を間接的な学び方の工夫でカバーをしていきたいもの

である。具体的には、観察、休憩や振り返りの時間に保育士等と語ることが挙げられる。経験談を交えた話し合いは、学生にとって何よりも貴重な場であり、将来へのあこがれを抱く機会にもなりうる。保育士等は成功体験ばかりではなく、失敗、苦心、悩み、困りごとなど、率直な思いも現実を理解するための手がかりとして大いに役に立つものである。



図表 7-2-6 実習期間に直接関わるのが難しい職務内容の実習評価項目

②訪問指導

【保育士等】学生が実習施設に伝えられないことや疑問点などを養成校の訪問指導者を通じて把握し、実習指導や評価に反映することができる情報収集の場として活かしていきたい。

訪問指導者の来園日に学生が欠席した場合、速やかに養成校へ欠席と対応相談の連絡を入れることによる協力は、協働性と同僚性を発揮した取り組みの一例である。

③実習中の指導

【保育士等】学生が質問をしやすい雰囲気や、直接声をかけながら質問を引き出すサポートが望まれる。実習期間に直接関わるのが難しい職務内容の評価項目をテーマに取り上げ、観察や保育士等との話し合いなどで間接的に学ぶことができる。学生から質問が上がらない場合には、振り返り時間等を利用した機会を心がけて設けていきたいものである。

④事後指導

<p>《共有する事項》</p> <ul style="list-style-type: none"> • 実習評価を開示する意義 • 実習評価項目 • 実習評価基準 • 開示：学生が結果から学ぶ機会 事後指導等による学生のふり返し 今後の課題につなげる機会 <p>※学生に開示できない部分は別紙に記入し、開示しない手立ても可能</p>

図表 7-2-7 養成校と実習施設における実習評価票の共有事項

【保育士等】実習最終日の総括や実習終了後に提出される実習記録や養成校へ提出する実習評価票を通して、学生の実習への取り組みや良かった点、課題を率直に伝えることで学生は次の実習への学ぶ糧を得ることとなる。間接的な事後指導を通して保育士等や子ども達とふれ合った充実感が保育者としての喜びに変容していく大切な時期である。同時に、学生の実習態度や知識・技術の習得についてどのような実習環境を提供できたかを振り返ることが望ましい。

⑤実習後の振り返り

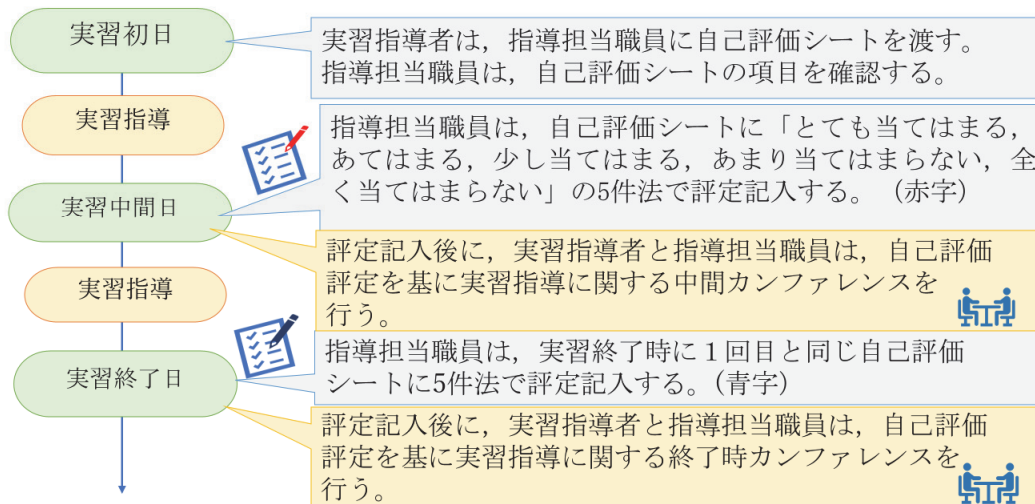
【保育士】学生への事後指導と同時に、学生の実習態度や知識・技術の習得についてどのような実習環境を提供できたかを自己評価を通じて振り返ることが望ましい。実習に関する自己評価の実施は、実習園全体や保育士が自分自身と向きあって、自身の変化や良かった点、改善すべき点などに自ら気付くことを目的とした振り返りの手法である。また、指導担当職員の実習指導に対する不安感と困難感を解消するために、指導担当職員が自身の実習指導を振り返ることで自身の実習指導の課題を掘り起こさせることを目指すものである。

前向きな評価によるフィードバックは、実習園や保育士自身の成長に寄与する基本であることを常に心にとめておきたいものである。

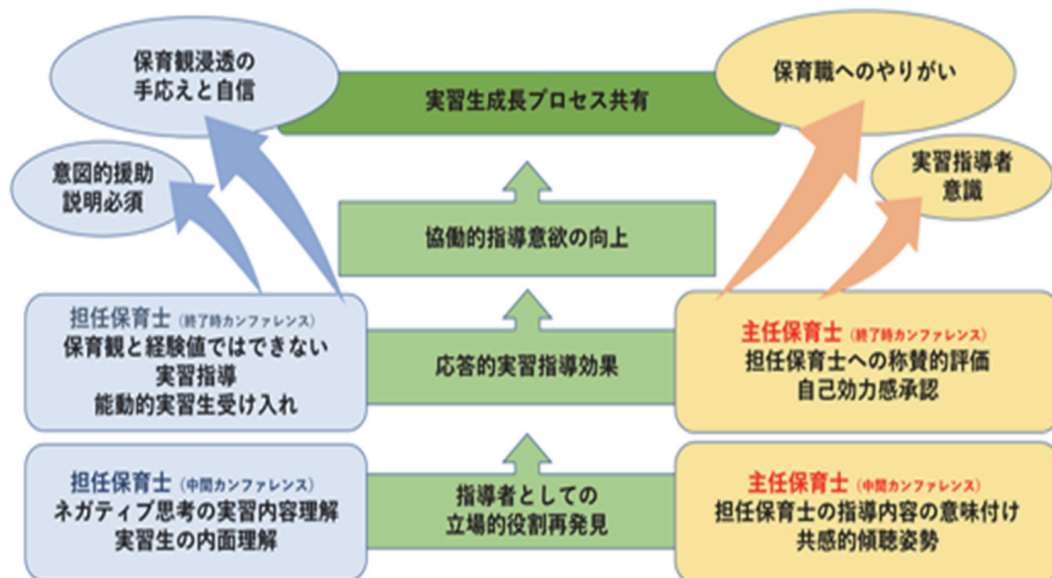
以下は、実習指導のための自己評価シートの取り組み例である。保育と同様、実習期間中に振り返る機会を持つことにより実習指導者の意識の向上や、保育職へのやりがいを見出す機会をもたらすこととなる。ここで、重要なのは、指導担当職員の自己評価を基に、実習指導者とのカンファレンスを実施することである。指導担当職員が自己評価するだけでなく、カンファレンスを通して実習指導者と対話する。指導担当職員は、実習指導への課題の焦点化が促されることによって、実習の指導内容の具体化に繋がり実習指導への意欲が喚起されることを目指す。自己評価をすることにより、実習指導者は、指導担当職員の実習指導に対する悩みや課題に耳を傾け、指導担当職員の実習の指導内容を意味付け、指導内容の

承認を伝える実習指導者としての役割を意識、指導担当職員と協働的な実習指導を目指すことが可能になる。

「実習指導のための自己評価シート」を用いた
実習指導者と指導担当職員のカンファレンスによる保育実習指導モデル



図表 7-2-8 「実習指導のための自己評価シート」を用いた実習指導者と指導担当職員とのカンファレンスによる保育実習指導モデル（畠田）



図表 7-2-9 実習指導者のための自己評価尺度シートを用いたカンファレンスにおける実習指導時の指導担当職員(担当保育士等)と実習指導者(主任保育士等)の意識変容プロセス（畠田）

Ⅶ. 保育実習指導における連携・協働の方法

実習指導のための自己評価(保育所)

- 活用方法
 ①指導担当職員（担任保育士）は実習生を受け入れた一週間後（金曜日）に1回目を赤色で記入する
 ②実習指導者（主任保育士またはそれに準ずる職員）と15～20分間カンファレンスを行う
 ③指導担当者は実習生を受け入れた最終日（金曜日）に2回目を青色で記入する
 ④実習指導者と15～20分間カンファレンスを行う

記入日 年 月 日（ 曜日） ※項目の初めに「私は」をつけて読んでください。

保育実習指導のための自己評価3 4 項目	あてはま らない	あてはま る	あてはま る	あてはま る	あてはま る	あてはま る
1 実習生を尊重した関わり						
1 実習生の言うことや考えを受け止めている	1	2	3	4	5	5
2 実習生の表情を見て緊張を和らげている	1	2	3	4	5	5
3 実習生の悩みに寄り添い一緒に考えている	1	2	3	4	5	5
4 実習生の考えを肯定的に受け止めている	1	2	3	4	5	5
5 実習生と積極的にコミュニケーションをとろうとしている	1	2	3	4	5	5
6 実習生が積極的に学ぼうとする姿を認めている	1	2	3	4	5	5
7 実習生が聞きたいことを聞ける雰囲気をつくっている	1	2	3	4	5	5
8 実習生を客観的に評価している	1	2	3	4	5	5
9 実習生の目標を確認し、理解している	1	2	3	4	5	5
10 実習生が嫌な思いをせず、理解できるように伝えている	1	2	3	4	5	5
11 実習生と実習指導者(主任等)との良い関係をつくっている	1	2	3	4	5	5
12 実習生への意欲が高まるような声掛けをしている	1	2	3	4	5	5
2 保育所実習の原則や理念の理解						
1 実習生に保育者の職業倫理について説明している	1	2	3	4	5	5
2 実習要領を読み理解し、実習内容を把握している	1	2	3	4	5	5
3 実習生受け入れの際、自分も課題をもって受け入れている	1	2	3	4	5	5
4 実習生に園の子育て支援について説明している	1	2	3	4	5	5
5 実習生に自己課題を見つけ取り組む機会を与えている	1	2	3	4	5	5
6 実習生を受け入れる気持ちに余裕がある	1	2	3	4	5	5
3 保育実践力を生かした指導						
1 実習生に保育室等の環境について説明している	1	2	3	4	5	5
2 実習生にクラスの子どもについて配慮してほしいことを知らせている	1	2	3	4	5	5
3 個々の子どもの発達に応じた援助やかかわりについて説明している	1	2	3	4	5	5
4 実習生が気付いてほしいことを伝えている	1	2	3	4	5	5
5 実習生に保育者としての役割を伝えている	1	2	3	4	5	5
6 実習生に伝える時になぜそうなのか意味づけして伝えている	1	2	3	4	5	5
7 実習生にわかりやすく理解できるように事例などを挙げている	1	2	3	4	5	5
8 実習生が自分で考えられるような機会をつくっている	1	2	3	4	5	5
4 指導案・実習記録にかかる指導時間の確保						
1 実習生と保育指導計画について話す時間をつくっている	1	2	3	4	5	5
2 指導計画の書き方を指導している	1	2	3	4	5	5
3 部分・責任実習の事前の相談に乗っている	1	2	3	4	5	5
4 実習記録を毎日記入し、早めに返すようにしている	1	2	3	4	5	5
5 実習生と保育の振り返りをする時間をつくっている	1	2	3	4	5	5
5 指導者自身の保育への姿勢						
1 実習中も変わらず子どもを大切に思い保育している	1	2	3	4	5	5
2 実習中であっても保育にやりがいを感じている	1	2	3	4	5	5
3 実習中であっても普段通りの保育をしている	1	2	3	4	5	5
中間振り返り	自己評価から気づいたことや感じたことを書いてみましょう					
振り返り	自己評価から気づいたことや感じたことを書いてみましょう					

図表 7-2-10 実習指導のための自己評価（保育所）

(2) 評価を踏まえた計画の改善

【保育士等】保育実習には保育実習と保育実習指導それぞれで評価が実施され、単位として明確に分けられている。最終的な単位認定の決定権と責任は、養成校にある。そのため、実習施設では評価項目の評価基準を「実習中の実習生として」率直に評価していきたい。また、実習評価を終えた後に実習を自己評価等で総括し、実習指導の課題を見出し、次の実習に向けた計画の改善を図っていきたい。

【実習を通じた職業能力育成】

【保育士等】保育所保育指針が示す、子どもの主体性を尊重する保育を計画する保育者は、子どもの世界の面白さ、やりがいを経験し、保育の専門職として時間と経験を重ねて成長し続ける。

実習は、保育者に職業能力を育む学びをもたらす。実習期間に保育の魅力を経験できる実習指導方法を実習前に計画し、実習施設全体で共有しながら自分の職業の原点を見つめる機会を得られる。例えば、振り返りの時間に学生のコメントを聞いたり、実習記録で保育のねらいと実際のずれや良い点に気付いたりするなど、自分自身の保育を客観的に省察し成長し成長を感じる機会になる。実習は職業として保育者の能力を意図的に伸ばすチャンスとなりうる。

実習の通過点にいる学生に温かな眼差しと保育者の使命とやりがい、専門性の難しさや喜びを、率直に伝えながら、保育の振り返りの機会にできる貴重な経験となる。

実習指導方法の改善を図る PDCA サイクルは、実習指導の中にも存在する。学生の頑張る姿や変化をフィードバックして、前向きな気持ちになるような日誌のコメントを心がける。保育者がファシリテーターに徹して、学生が主体性を発揮できる環境づくりに努め、保育者として成長したいと思える実習の取り組みを展開していきたいものである。

【実習指導方法の改善につなげる取り組み例】

【保育士】実習評価票の活用した実習内容の点検や評価項目の体験の場の設定、学ぶ方法は工夫次第で実施が可能である。実習園の状況に応じて、実習体験の場をできるだけ提供して、保育への学びを深めることができるような協力と協働の体制を大事にしたい。

①守秘義務や個人情報の漏えい防止に努める等承諾を得て可能な範囲で開示された実習施設の資料から評価内容項目について学ぶ。

指導計画(全体的な計画・月案・週案など) デイリープログラム 個人記録 連絡帳 園だより・クラスだより 指導の記録 環境づくりの記録 保健計画・避難訓練計画等 パンフレット
--

図表 7-2-11. 実習施設の資料による知識・技術の習得 (例)

Ⅶ. 保育実習指導における連携・協働の方法

②実習評価票の評価項目内容を学ぶための実習園での取り組む行動を示す。時と場に応じて保育中も活用した学ぶ機会をつくっていききたい。

観察
参加
保育者への確認
話し合い
質問する機会
保育カンファレンス

図表 7-2-12 実習評価票の評価項目への取り組み方法（例）

③観察対象の年齢と場面の組み合わせによって実習評価票の評価項目内容や学生の実習課題を保育場面から見つけることが可能になる。
ア. 年齢対象を選択し、その年齢で学べる保育場面と組み合わせる。
イ. ひとつの保育場面を選択肢、同じ保育場面での発達過程を比較しながら子どもの成長を理解する。

生活の流れ		乳児 1歳児 2歳児 3歳児 4歳児 5歳児
生活 場 面	登所	
	降所	
	午前の活動	
	午後の活動	
	食事	
	間食	
	排せつ	
	午睡	
	遊び	

図表 7-2-13 観察対象と場面の組み合わせ（例）

④保育中に保育士へ確認や質問をしてみる、保育記録へ質問を記載するなどの場を通じて学生が自ら学ぶ場をえることのできるテーマ例を以下に示す。事前オリエンテーション等でどのようなテーマが実習生の学びを深めるか本人と話し合い、実習課題にすることも考えられる。実習前に学生が、様々な学び方や場があることを理解する機会は大切である。

保護者支援の場に立ち会う 園庭開放を観察する機会

保育実習Ⅰ(保育所)		保育実習Ⅱ	
長時間保育	保育士の1日の職務内容	子どもの最善の利益	環境構成を変えた後の遊びや生活の変化
保育士としての心構え	家庭との連携に関わる職務	子どもの人権の尊重	現代社会の様々な保育ニーズ
子どもの発達過程	連絡係や園クラスだより（家庭との連携）	説明責任	保育士のこれまでのキャリア
環境を通して行う保育	様々な働き方：正規職員 パートタイマー	個人情報の保護	地域の関係機関との連携方法 ・要保護児童対策地域協議会 ・児童相談所・児童家庭支援センター
家庭との連携	他職種の職員：保育士 看護師 栄養士	子どもへの対応	連携方法
発達過程に応じた援助の工夫点	登所・降所までの子どもや保護者に関する情報共有の仕方	・体調不良・アレルギー ・特別な配慮を要する子ども	小学校との連携方法
清潔保持のための取り組み			主体的に活動する姿を引き出す環境構成
健康で安全に過ごせる環境づくりのポイント	自己研鑽に繋ぐ研修方法や内容	行事等特別な活動における保育士等の具体的な動き	主体的に活動する姿を引き出す関わり
危機管理対策の取り組み	自己管理の工夫	環境を通して行う保育	PDCAサイクルに沿った取り組み
避難訓練の取り組み	登所・降所時の保護者とのコミュニケーション	生活や遊びを通して総合的に行う保育	子育て支援・育児支援

図表 7-2-14 保育者への確認、質問する機会、話し合いのテーマ（例）

Ⅷ. 保育実習指導における課題解決：

実習施設と養成校との連携・協働（討議）

- ①実習受け入れ機関／養成校が、実習の意義を受け止め、実習指導体制を組織的に作り上げる。
- ②実習生の自己覚知を支え、実習生が実習記録・指導／支援計画を自ら改善できるようになる訪問指導・事前事後指導を行う。

[テーマ1] 効果的で効率的に実習指導を進めるための実習指導体制のあり方に関して提案してみましょう。

[テーマ2] 効果的で効率的な実習記録・指導/支援計画作成のあり方に関して提案してみましょう。

[テーマ3] 保育の魅力を感じられる実習になるための実習指導のあり方に関して提案してみましょう。

一般社団法人全国保育士養成協議会

令和 5 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業（こども家庭庁）「指定保育士養成施設及び実習先保育所の実習指導担当者に対する効果的な研修の在り方に関する調査研究」

発行 令和 6 年 3 月 31 日

編集担当 穴戸 良子 (作新学院大学女子短期大学部)
水野 恭子 (岡崎女子大学)
鳶田 弘子 (名古屋短期大学)
山田 朋子 (中村学園大学)
三浦 主博 (仙台白百合女子大学)